

**【今回の1冊】 カズオ・イシグロ (2008)  
『わたしを離さないで (Never Let Me Go)』土屋政雄訳、早川書房。**

この本の粗筋

第1章 (第1部)

キャシー・Hのモノローグで物語は始まる。彼女は31歳で、優秀な「介護者」。「提供者」の身の周りの世話をする仕事。幼い頃に育った「ヘールシャム」の回想が語られる。癩癩持ちで他の男子からからかわれていたトミーと女子グループのリーダー格だったルース。

第2章

ヘールシャム(≒寄宿学校)での生活。年に4回行われる「交換会」という自分の図画工作品の展示即売会。生徒たちは、創造的であることが求められる。それが苦手だったトミーは、自分の制作に熱心に取り組むこともせず、手抜き作品は周囲の嘲笑の的となる。

第3章

そんなトミーに「絵を描きたくなければ描かなくていい」といったのはルーシー先生。実際、エミリ先生を筆頭に他の多くの保護官からは創作が推奨され、生徒たちの作品の中での出来がいいものは、学外からの謎の来訪者「マダム」が「展示館」用に持ち帰っていく。

第4章

その理由が気になる生徒たち。保護管たちは「とても大切な理由があります」と伝えるも、真相についての口は固い。また、ここではキャシーとルースの出会いについて語られる。当時2人は7~8歳で、ルースが女子の間で人気の保護官の親衛隊にキャシーを誘う。

第5章

ヘールシャムの外の世界に関する不穏な噂。敷地外の森で、失踪した男子が体を木にくくりつけられ両手・両足を切り落とされていた。女の子の幽霊が森を彷徨っているなど。生徒らにとっての世界とは、ほとんどヘールシャムの内側を意味していた。

第6章

2つのキーワード。ジュディ・ブリッジウォーターのカセット。「ノーフォーク(ロストコーナー)」という場所。また、生徒の喫煙に対して異常なほど厳しい態度をとる保護管たち。生徒は体を、特に内部を健康に保つことが普通の人間よりも重要だと教えられる。

第7章

ヘールシャム最後の数年間(13~16歳)の頃の思い出。ルーシー先生によって秘密の一端が明かされる。キャシー、トミー、ルースを含むこの施設の人間は自らの臓器を提供するために生み出された存在であるということ。また、彼ら彼女らは、生殖機能ももたない。

## 第8章

ルースとトミーがヘールシャムで公認のカップルとなる。施設の性文化は乱れてはいないものの、愛し合うもの同士ならばセックスを神聖視する傾向にあった。キャシー(16歳)は、本当に特別相手とのときに失敗したくない、という思いから練習相手探しを始める。

## 第9章

ルースとトミーの破局。「後釜はあなた」と周囲に言われ混乱するキャシー。練習相手から逃げ出すものの、ルースから「トミーとよりを戻したい」と相談をされる。秘密を暴露したルーシー先生が保護管を辞め、キャシーらもヘールシャム最後の日を迎える。

## 第10章(第2部)

キャシー、トミー、ルースを含むヘールシャム卒業生8名は、類似の施設からも若者が集まる「コテージ」に送られ、そこで徐々に社会性を身につけていく。トミーとルースはカップルを再開、キャシーとルースはコテージでの振る舞い方をめぐってときに衝突する。

## 第11章

コテージの性文化はヘールシャムのものと異なり、慎ましく秘匿的。そして、ある目的のためにポルノ雑誌のページを一心不乱にめくるキャシー。それを見つけたトミー。また、コテージの若者は、「介護人」になるための講習会を受けてからこの施設を去っていく。

## 第12章

ここで、ヘールシャムの生徒らが、イギリスのどこかで実際に生活している個人(「親」)のクローンであることが語られる。ルースにとって、その可能性がある人物(「ポシブル」)を求めて、ノーフォークへ旅をする。キャシーら3人とクリシー・ロドニー、の計5人。

## 第13章

旅の途中、ロドニーとクリシーのカップルが3人に尋ねるヘールシャムの噂。臓器の提供者となる前の男女が、心底愛し合っていて、かつそのことを証明できれば、数年間二人で暮らせる猶予期間が与えられる、というもの。しかし、3人もそれが本当かはわからない。

## 第14章

ルースのポシブル探しは失敗に終わる。それらしい人物(50歳ぐらいの女性)をしばらく観察するも、全員一致で「あれは違う」。落胆し機嫌を損ねる恋人のトミーにもあたるルース。二手にわかれるときに、トミーはルースではなくキャシーと行動する、と宣言。

## 第15章

トミーは、町でキャシーのヘールシャム時代の宝物だったジュディ・ブリッジウォーターの中古カセットを探すことを提案する。そのときトミーは、昔マダムが展示館のために集めていた作品が、二人の愛を証明する鍵として、猶予期間と関係するという仮説を披露。

#### 第16章

ノーフォークから帰還後、創作が苦手だったトミーは密かに練習していた動物の絵をキャシーに見せる。ルースはトミーに詰め寄り、彼の自説を聞き出した後に、キャシーも含めて皆がその努力をバカにしていると誤解を招く情報をわざと与え、失望を与えようとする。

#### 第17章

この一件から、三人の仲は冷え込み、ルースとトミーも二度目の破局直前。その時期にルースは、カップルの提供猶予の話題をキャシーに持ちかけ、「トミーはあなたをガールフレンドとしては見ていない」と告げる。キャシーは介護人になる決意を固めコテージを去る。

#### 第18章 (第3部)

通常、クローン技術で生み出された人間は、提供者の介護人を務めたあとで自身も提供者になる。キャシーは自らが介護人に向いていたと感じる。職務中にヘールシャムが閉鎖したことを知る。そして一時、提供者となったルースの介護人となる。

#### 第19章

キャシーとルースは、トミー(2回提供済み)に会いに行く。そして、提供者の間で噂の打ち上げられた漁船を見に行く。そこでルースは、キャシーとトミーの仲を裂いたことを懺悔し、二人で提供猶予を目指すことを勧める。ルースは2度目の提供後、この世を去る。

#### 第20章

ルースの遺言を受けて、キャシーはトミーが3度目の提供が終えた直後に彼の介護人となる。愛を証明する必要もあって、二人は初めてセックスをする。そして、猶予申請の噂の真偽の鍵を握る人物、ヘールシャムで生徒の作品を集めていたマダムを見つけ出す。

#### 第21章

大人になってからのトミーの作品集を携えてマダムの家を訪ねた二人。提供猶予の検討を懇願するトミー。キャシーといかに愛し合っているかを告げ、ヘールシャム時代に熱心に創作に励まなかった後悔を語る。その直後、なぜか保護管だったエミリ先生が現れる。

#### 第22章

真実を語るマダム(マリ・クロード)。猶予などない。ではなぜ生徒の作品を集めていたのか?クローンといえど、普通の子供と同じで感受性豊かで理知的な人間に育ちうることを証明するため=人道的運営を謳うヘールシャムの運動だった。帰り道で取り乱すトミー。

#### 第23章

4度目の提供の通知がトミーに届く。キャシーの前では正常なままでいたいと願うトミーは、最後の最後で介護人を代える。そして、とうとう独りになったキャシー。あてもなく彼女が向かったのはノーフォーク。そこで失ったものに思いを馳せ、静かに涙を流す。